

## 2023年5月14日 説教「無くてならぬもの」

ルカの福音書 10章 38-42節

今朝は先主日のテーマ「自分の日を正しく数える」（詩篇 90:12）とも関連して、福音書から学んでいきます。

### 1. マルタとマリヤ (38-39節)

#### ①ある村 (8)「さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、」

ある村とは、エルサレムから4キロほど東にあるベタニヤであることは間違いありません。イエス・キリストはエルサレムに入る前、この村によく立ち寄られました。

#### ②迎えたマルタ (38)「マルタという女が喜んで家にお迎えした。」

その村にはある一家が住んでいました。ここに出て来るマルタとマリヤそして、ラザロの三兄弟のいる家族でした。エリヤやエリシャにも立ち寄る家があったことを思い出します。ラザロについては、ヨハネの福音書 11章において、息を引き取ってから蘇生を与えられた出来事がありました。さて、イエスの来訪を受けて、姉マルタは大歓迎しました。気持ちよく過ごしていただくために、できる限りのことをしたことでしょう。

#### ③主の足もとに (39)「彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。」

ところが、マルタの妹マリヤは、委細構わず、主の足もとにすわったのです。そして、主の語られる御言葉に聞き入り始めたのです。

### 2. マルタの要望 (40節)

#### ①落ち着かないマルタ (40)「ところが、マルタは、いろいろもてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。」

一方、姉のマルタはイエスをもてなすことに懸命でした。イエスが来られるや、その足を洗ったことでしょう。家に入れば、疲れたお体を休めてもらい、必要なものがないかと尋ね、あればそれを持ってきたことでしょう。そして、食事の準備を早速に始めたことでしょう。ともかく、イエスに喜んでいただけることを、できる限り行ったのです。しかし、心の中は落ち着かず、わさわさとしていました。

#### ②不服を述べるマルタ (40)『主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。』

ふと妹の方を見ると、マリヤはイエスの足許に座って、御言葉に聞き入っています。自分だけ働いて、マリヤはイエスの話を聞いている。それにいらだったマルタはイエスに訴えたのです。『主よ。妹が私だけにおもてなしをさせています。何ともお思いになりませんか。』マルタにすれば、食事を作るのにもマリヤの手伝いがあれば



助かるのですから。

③イエスへの要望 (40) 『**私の手伝いをするように、妹におっしゃつて下さい。**』

そして、マルタはイエスにはっきりと要望したのです。妹がもてなしの手伝いをするように、妹に言ってあげてください。私はとても忙しいのですから。

3. マリヤは良いほうを選んだ (41~42 節)

①マルタへの注意 (41) 『**主は答えて言われた。『マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。』**』

マルタの要望に対して、主はどのように対応されたのでしょうか。マルタの気付かない問題点を指摘されたのです。『マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを心配して、気を使っています。』マルタの心がどこにあるのかと、そこにメスを入れているのです。忙しさ、心配、気遣い。どこかに忘れ物をしていました。

②どうしても必要なこと (42) 『**『しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、ひとつだけです。』**』

主は、究極のことを見ておられました。「どうしても必要なことはわずかです」。『無くてならぬものは多くはない』(口語訳)。それはわずかだと言われた後に、イエスは「いや、ひとつだけです」と断言されたのです。

③マリヤへの対処 (42) 『**『マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。』**』

その上で、マルタの要望に対して、主は言われます。「マリヤはその良いほうを選んだのです。」とし、マリヤはどうしても必要なひとつを選んでいいるのだから、「彼女からそれを取り上げてはなりません。」と言われました。マルタはつれないお応えをいただくことになってしまいました。

《結論》

今朝の聖書箇所から、三つのことを学んでいきたいと思います。

第一に、主イエスは、よく働くことや忠実に事を成すことや一生懸命に務めることを、否定されているのではない、ということです。マルタがイエスのもてなしのために、働いていることを問題にされているではありません。

イエス・キリストはこんなことを言っておられます。「主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢い僕とは、いったいだれでしょう。主人が帰って来た時に、そのようにしているのを見られる僕は幸いです。まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せようになります。」(マタイ 24:45~47)。ここにおいて、主イエスは忠実に

働くことの価値を述べておられます。

また、「聖徒の入用に協力し、旅人をもてなさない。」(ローマ 12:13) とあるように、マルタが旅の疲れを覚えるイエスをもてなそうとしていることは、聖書的で美しいことなのです。

第二に、それではマルタの何が問題とされているのでしょうか。マルタは、自分が懸命に働いているなかに、妹マリヤの姿をみて、いらだちました。そして、それをイエスに訴えて、マリヤを手伝わせてくださいと要望したのです。自分ばかりが働いて、マリヤはイエスの話を聞いている。それでは、不公平だとも思ったのです。喜んで働いている間は良かったのです。しかし、マリヤと比較し始めたところに問題が始まったのです。与えられている自分の役割を黙ってやり通せば良かったのですが、それができませんでした。

「愛は寛容であり、親切です。また、人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。」(第一コリント 13 章 4 節) とあります。マルタはここにある愛(アガペーの愛)の逆方向に心を引っ張られてしまったのです。寛容な心が失われ、マリヤを妬み、自分こそが働いているという高慢に陥ってしまったのです。それを主イエスはご指摘されているのです。

第三に、主イエスは「どうしても必要なものはひとつ」と言われている点です。私達の生活には、様々な要素があります。ここで、主はありとあらゆることを含めて、無くてならぬものは一つだと言われているのです。生きることのご真ん中に、それがあるのだと言おうとされいると考えられます。ここでマリヤはそれを選び、安心してそれに没頭していたのです。姉マルタに対する配慮が無さ過ぎるという意見を聞くこともあります。しかし、主はそれをも受け入れて、「彼女からそれを取り上げてはいけません。」と言われているのです。

それほどのもとは何なのでしょう。それはマリヤがイエスの話をよく聞いていたという外面のことでしょうか。そうではなくて、その時にマリヤが主なる神と交流し、神を知り、まことの平安と喜びをいただいていくという出来事を経験しているからです。マリヤも家の仕事をしないわけではありません。その時点では、主イエスの言葉に聞き入ることが、御心だったのです。

入院中の最後の 10 日ぐらいは、ようやく活字が読めるようになり、聖書を集中的に読ませられ恵まれました。御言葉を通して、主を身近に感じることができました。マリヤはまず神の国とその義とを求めたのです。主との霊的な交わりを得ることに心が向けられていました。私たちは何を求めているのでしょうか。私たちの魂が恵まれることを大切にしているのでしょうか。「どうしても必要なこと」を、まずは求めていこうではありませんか。